

第1章 「もの」と「こと」の意味論 ④

第4節 ケセン語訳聖書の衝撃

「創世記」の冒頭と「つとめ」第2節の決定的なちがいは、天と地とが逆転しているところにある。後者は易学の「地天泰」の裏守護思想を背景に、上に昇ろうとするものである天と、下に沈もうとする地が逆転して「地天」となり出会い、そこで天地が交わって、「もの」と「こと」が生まれる。つとめ第2節の手振りはその象徴を見事にあらわしている。天上の月日親神が地の泥海という場所に出会っている。その出会いの場所において、つまり地天をかたどって陽気暮らしを目的につくられた夫婦が、この世の初めだしとして「良し」とされる。「悪しきことは言はんでな」とは、つまるところ、その「悪しき」の手振りが病を示しているような手枕のような形をし、「こと」は「もの」と同じように「みかぐらうた」を通して両掌を胸の前に掌を上向きにして「平に揃える手」という形でほぼ統一されているが、「この世に病とゆうてさらになし、神の道おせ手引きなるぞや」と教えられるように、病を神の手引きとして人間創造の目的である陽気暮らしに収斂してゆく意味をもつものと解釈すれば、さいごの合掌で口誦される「ようし、ようし」の祈り言葉と手振りは、さらにその目的を事（こと）成せる祈りとなる。「悪しきこと」とは、それが否定昇華されるべき「良きこと」を前提としたことばであったと解釈されるからである。いずれにしる「つとめ」の第1節「たすけたまえ」の手振りが「天理王のみこと」と「平に揃える手」と相似し、十一下り目の「夫婦揃うてひのきしん」と、十二下り目の最後の「大工の人も揃い来た」の「揃う」の手振りが、両掌を内向きに指先を上向きにして上腹の前に揃えて立てる型であることは、上下縦横平等であるべき人間と天降る天理の合体思想を連想させ、手振りの内奥にもたすけの理の順序とコスモロジーが秘蔵されていて、神意の解釈の深い読み解きが大切であることを思わせる。身体の動きにも「こと」（言）では表現できない思想的な意味が籠められていたのである。

さて、独学で古代ギリシャ語原典を勉強し聖書のケセン語訳を成し遂げた山浦玄嗣は、東北大地震で被災し岩手県気仙地方で医師をつとめるクリスチャンである。『イエスの言葉―ケセン語訳』（文春新書、2011年）では、氏は著書の最後に「新しい聖書の訳語のこころみ」として、従来訳と新しい訳を40例あげているが、その訳出の新鮮さを示すために、その中より十数語を参考として列挙しておきたい。ちなみにすべてこれらの語彙は本文のなかでくわしく解説されている。

愛するは「大事にする」。／命は「幸せに生き生きといきること、またその力」。／祈るは「神さまのお声に心の耳を澄ます」。／神の国は「神さまのおとり仕切り」。／キリストは「お助けさま」。／悔い改めるは「心をすっぱり切り換える」。／信仰は「神様を力頼りにすること、信頼すること」。／救い主は「お助けさま」。／洗礼者ヨハネは「お水潜らせのヨハネ」。／近づいたは「今まさにここにあり」。／福音は「よき便り」。／復活は「また立ち上がる」。／メシアは「お助けさま」。／予言は「御語り」。／わたしは道であるは「わたしは人を本当の幸せにみちびく」。

という気仙地方の方言をもとにした古代ギリシャ語からの日本語訳である。

神から使わされる救世主を意味するメシアを、ギリシャ語

ではキリストと呼ぶが、それをケセン語風に「お助けさま」と訳出するばあいの解釈や、洗礼を「お水潜り」と訳出されたのには、その古代史的背景を知るにおよんで驚きをもって納得させられた。言葉がピチピチとして生きているのである。とくに印象に残っているのは「信じて祈るならば、求めるものは何でも得られる。」と日本語訳された新共同訳の「祈り」の「プロセウコマイ」の「祈る＝願う」の解釈は、舌足らずで大きな誤解を招くとして、「祈りはアラジンの魔法のランプではない」、それは「神さまの声に心の耳を澄ます」と訳すべきで「神さまに全幅の信頼をおきつつ、自分の使命について神さまのお声を聞きたいという思い（プロセウコマイすること）で、「乞い求める（デオマイする）なら、それはすべて必ずかなう」という意味に解せられる新共同訳は（プロセウコマイすること）ではないと批判している点である。ここで学ばされたのは、天理教の「つとめ」の第2節「ちよいとはなし、かみのいうこときいてくれ」という、親神の言葉の人間の「祈り」に至る解釈深化の要請であった。

イエスはガリラヤの山里ナザレに住む百姓大工だった。この大工の青年が当時、国中の者たちを熱狂させていた「お水潜らせのヨハネ」にあうためにあるときふと家を出てヨルダン川に姿を現した。その時の山浦氏の洗礼（お水潜り）の説明はこうだ。先ず頭までズブリと水に沈められ、息が出来なくなって窒息しそうになる。う、う～、苦しい！ そうだ、今おれはここで死ぬのだ。今までの生き方に別れるのだと思い定めて、ザバツと顔を水面に出す。窒息寸前の肺に新鮮な空気が吸い込まれ、ああ、おれは今新たな命に生まれ変わった。これからは神様のお取り仕切りにこの身を捧げるのだと念じ、心を定める。

この「お水潜り」が大流行して、国中からヨルダン川に人々が集まりはじめる。まさにあたらしい時代到来の予感である。ヨハネは危険人物視されて投獄される。ガリラヤで伝道を始めたイエスはヨハネが叫んだ同じ言葉を叫ぶ。「悔い改めよ。天の国は近づいた」（新共同訳・マタイ3・2）。この言葉を山浦氏は気仙沼の人たちに分かりやすく「さあ、心をスッパリ切り換えろ。神さまのお取り仕切りは、今まさにここにあり！」と訳す。当時のユダヤ人たちはローマ帝国の属国としてその重圧に苦しみ、神様が人の世をあるべき姿になおしてくださる。そのために神様がよこされる「お助けさま」が、人間が幸せになるためにはどのようにすればよいのかを示してくださる。人々を幸せにする神様のお取り仕切りがこの世になるのだ。ヨハネやキリストが言っているのはまさにそのことなのだと熱狂したという。

洗礼には古い人格が消滅して、新たな生命がよみがえるという強烈な歴史的思想があり、単なる改宗・入信の通過儀礼ではない。一般にキリスト教の洗礼は、未信者を教徒にするための教会の儀式の一つで、現代の天理教のおさづけの理の拝戴をもって「ようばく」として信者になる儀式に相当するであろう。しかし、洗礼には全身を水中に浸す浸礼と頭部に水をそそぐ滴礼とがある。なかでもカルバン派の流れをくむバプティストは、幼児洗礼を認めず、成人して信仰告白をした人のみ浸礼を行うべきだと主張する。洗礼には死者洗礼、未受洗者が迫害を受

（13頁へ続く）

(3頁からの続き)

人の方が生きいきとしている”などと嘆いている人がいますが、それは、切り出された用木は、まだ根のある山の木とは違うということ。用木は期待される役目を果たすために、手入れもされるし磨きもかけられる。しかし、それを嫌がり拒否していれば、やがては打ち捨てられ、根がないので朽ちてしまうことになるのです。

しかるに、一方、必ずしも全ての人がよくになるわけではありません。ですから、自分がよくになるについての承認と協力を、家族や身近な人たちから得ることが必要になるのですが、それを得ることが容易でないことも、また、「ひながた」に示されているところなのです。

(4頁からの続き)

[補] 本連載 32 「その他の地域の海外伝道」でメキシコの天理教を書いたが、以下のように若干の補正を加えたい。

名古屋メヒコ教会を設立した安藤ペレス・せつ子は絵の勉強でメキシコに渡る前、名古屋大教会で森井敏晴会長（当時）から信仰の仕込みを受けた。森井会長から絵の勉強だけでなく、おたすけにメキシコへ渡るんだと、海外伝道への熱い思いを聞かされた。それは森井会長が二代真柱から教えられたことでもあった。メキシコでの安藤は美術学習とともに布教活動に勇躍し、大勢の若者をようばくに育てた。

(5頁からの続き)

けて死んだときに、そのながした血によって洗礼されて殉教者となる血の洗礼や火の洗礼などがある。天理教では殉教者という意識がそもそも不在であるから、それに対する儀式も不在である。しかし「みかぐらうた」の「いっせんにせんでたすけゆく」（九下り目の一）を「一洗二洗で助け行く」と漢字の訓読み表現をした場合（『おかぐらのうた』上田嘉成、天理教道友社、545頁、『みかぐらうた・おふでさき』村上重良校注、13頁）は、やまとことばではなく不自然で、くわえて天理教にも洗礼儀式があるのではないかと未信者には誤解されるおそれがないとは言えないであろう。筆者の「せん」論はやまとことばの多義性に触れて幕末の貨幣論から別項でおこなう。

(7頁からの続き)

くない。留学経験者と配偶者は、天理移民同様、ブラジルの天理教の「日系人化」を維持させる要因になったとみられる。また、同じ世代にはブラジルに移住して会長になっている日本人が7人おり、彼らも「日系人化」を強化しているともいえる。

しかし、その一方で、子弟世代は日本で「ブラジル人」アイデンティティを強く意識するようになっている。学生生徒講習会は子弟世代が企画しており、ブラジル人の感覚に合うように進められ、関心を高めている。このようにブラジルの天理教では「非日系人化」への模索が始まっている。

(10頁からの続き)

またもや行進中にストップ

7月27日午後7時、シチリアのパレルモで、カルメロ派の聖母マリア像の行進が、ポンティチェッロ通りの葬儀屋の前で、中年男の「生まれ」の一声でストップ。その葬儀屋というのは

マフィアのボスの経営だ。そのボスは捕らえられていて、北のノバラの刑務所に1年半も収容されているのだが、彼、アレッサンドロ・ダンブロージョは今40歳だ。

同じような事件があつてからまだ1カ月も経っていない。それは7月2日、イタリア半島の南のレッジョ・カラブリア州のオピード・マメルティーナで、自宅監禁の罪に問われている「ンドランゲータ」のボスの家の前で「恩寵の聖母マリア像」が、行進中にストップして、「お辞儀」をしたというものだ。その後、その時のマリア像の担ぎ手の25人が調査によって、7月9日に明らかにされた。その25人の中の一人は、「我々は『ドラングエータ』の二つの異なったグループに属し、神輿の前後に分かれている。しかし対立関係にあるのではなく皆友達だ」と語っている。

1800年代より「信仰会」と言う名目の小集団がシチリアではたくさん結成されていて、その実態はなかなか把握されないうでいた。例えば、このアレッサンドロ・ダンブロージョはカルメロ山の聖母マリア信仰会の信仰深き尊厳者と見られていた。地元の検事フランチェスコ・メッシオネは「この出来事は、この地区の日常生活に暗い影を落とした不幸な出来事である」と言及した。残念ながらマフィアのサブカルチャーは未だ生き残っているのだ。警察や陸軍警察の告発、逮捕そして内部告発にもかかわらず、事件のあったパレルモのパラロー界限では、40代のダンブロージョは、若者の間では神話的人物である。それは甥のフェイスブックへの次のような投稿でも読み取れる。「彼は我々全員の誇りである。」「彼は唯一者であり、特別者である。」この一連の出来事に、地区の神父ヴィンチェンツォは「不意の停止だった」「今年もまた起きてしまった」と呟いていた。枢機卿パオロ・ロメオはその行進のために代表団を送っていたし、ヴィンチェンツォ神父は「信仰会」のリストを要求されていた。事件のあった当日は枢機卿より特使も送られていたのだ。マフィアたちはこの「信仰会」を隠れ蓑にするのか、聖母マリア像の行進に非常に熱心だし、毎年復活祭前の聖金曜日の重大な聖行進を企画するのだ。これらの出来事はヴァチカンに苛立たせている。ヴァチカンの仲介は厳しさを増し、マフィアの介入を防ぐために「信仰会」の解散を求めている。

比較思想学会でパネル発表

金子 昭

比較思想学会第41回大会が7月20日、島根県松江市の中村元記念館で開催された。8本の個人研究発表、パネルディスカッション及びシンポジウムが行われた。私はパネルディスカッション「思想としての生命 第1回『出生と生命』」の部にパネリストとして発題した。パネリストとそのテーマは次の通り（発題順）。田中かの子・駒澤大学講師「いのちの『ありのまま』を引き受ける、という原則からの一考察」、安藤泰至・鳥取大学准教授「この世に生まれてくること—生命操作の時代のなかで—」、金子昭「人間的生命の出生をめぐる哲学的人間学の試み—」。コーディネータは沖永宜司・帝京大学教授がつとめた。